7) 動脈管閉鎖遅延に対するメフェナム酸経口投与とインドメタシン経静脈投与

岩谷 淳・大石 昌典
坂野 忠司・永山 善久
山崎 明・小田 良彦
（新潟市民病院 新生児医療センター）

未熟児動脈管閉鎖遅延に対する，メフェナム酸経口投与と，インドメタシン経静脈投与の有効性，副作用の危険性について検討した．

昭和62年5月より平成9年3月までに動脈管閉鎖遅延を認めた低出生体重児71名を対象とし，12例にメフェナム酸の予防投与を，52例の症候性 PDA に対して計18回のインダシン投与を行った．

メフェナム酸の予防投与の有効率は66.7％であった．症候性の PDA に対してはメフェナム酸の有効率53.8％に対し，インドメタシンの有効率は75％と高い値であった．メフェナム酸投与における副作用は乏尿を44.7％に認め，重大な副作用として4.4％に NEC，NEC 前状態の発症を認めた．これに対しインドメタシンは乏尿を72.2％に認め，16.7％に血小板減少，CRP 上昇を伴う腹部膨満を認めたが，全例，保存的な治療で軽快した．

8) 低出生体重児の6歳時の予後・厚生省心身障害研究全国調査・・

永山 善久・小田 良彦
大石 昌典
（新潟市民病院新生児医療センター）
中村 肇・上谷 良介
（神戸大学 小児科）

平成8年厚生省心身障害研究班において行われた超低出生体重児の6歳時の予後について報告した．3歳時の予後の評価ができている853例について調査し，350例の状況について解析できた．

運動発達では正常84.0％，軽度運動障害3.7％，脳性麻痺12.3％であった．3歳時に比して脳性麻痺の頻度に差はなかったが，3歳時運動発達正常の311例のうち，9例が脳性麻痺，12例が軽度運動障害と判定された．

知能発達では正常61％，境界21％，精神発達遅延19％であった．3歳時に比べて精神発達遅延の頻度には差はなかったが，境界の頻度が2.5倍に増加していた．注意欠陥多動障害が4.6％あった．

両眼失明2.0％，片眼失明0.6％は3歳時と差がないが，弱視の頻度が12.1％と2倍に増加した．聴力障害，喘息，てんかんの頻度には差がなかった．

超低出生体重児においては3歳時の知能評価には限界があり，継続医療が重要であることが明らかとなった．

9) 県内脳性麻痺の推定発生率及び型別危険因子の推移
—1966～1995年県内出生受診児より—

新田 初美・東條 恵
（新潟県はまぐみ小児療育センター 小児科）

当センターに受診した脳性麻痺（以下 CP）のうち，1966～1995年に県内出生の910人を対象とし，出生年を5年ごとⅥ期に分け，CP の推定発生率の推移，型別・危険因子別推移をみた．CP は男に多く（平均1.5倍），その発生率はⅡ期以後増加傾向にあったが，1.0前後で大きく変動することはなかった．危険因子としては低出生体重児の増加傾向は続いており（低出生体重 CP の発生率；Ⅰ期0.27→Ⅵ期0.61）（超低出生体重はⅤ期以後），伴って黄疸も微増傾向にあったが，仮死は変わりなかった．周産期以後の児側の危険因子項目保有数の増加（3項目以上；Ⅰ期7％→Ⅵ期50％）が目立っていた．また，Ⅴ期以後多胎（Ⅴ期から体外受精あり）の増加も見られた．型別では，Ⅴ期まで続いていた痙直型の増加・アテトーゼ型の減少が，Ⅵ期ではみられなかった．CP の発生率及び危険因子の推移に，周産母子医療の進歩とその時代の課題をかいま見ることができた．

10) 術後長期にわたり腸閉塞状態が続き，管理に難渋した超未熟児回腸穿孔の一例

飯沼 泰史・八木 実
岩渕 眞・内山 昌則
松田由起夫・内藤万砂文
須藤 正二・内山 聖
（新潟大学 小児外科）（同 小児科）

症例は25週，872 g の男児．出生後より RDS あり，3生日より腹部膨満出現，6生日に穿孔性腹膜炎の診断で手術を施行した．穿孔部は回腸で，縫合閉鎖，腹腔ドレナージを施行した．12病日より経口摂取を開始したが，31病日に突然腸炎から DIC を併発した．保存的治療にて DIC は改善したが，癒着による通過障害が腸炎の原因と考え，61病日に癒着剥離術を施行した．しかしその後の腸管運動の回復は芳ばしくなく，約1か月保存的治療を工夫した結果（ミルク投与法，薬物療法，IVH）114病日に退院した．